



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	目標再生：子どもの目標再生を支える教師の関わりとは？
Author(s)	伏木, 久始; 佐々木, 千穂; 余郷, 和敏; 田郷岡, 正秀; 吉田, 恒; 圓谷, 秀雄
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学教育学部附属竹早小学校・幼稚園, 19: 157-166
Issue Date	2003-05
URL	http://hdl.handle.net/2309/6048
Publisher	
Rights	

第3分科会

目標再生

子どもの目標再生を支える教師の関わりとは？

伏木 久 始 佐々木 千穂 余 郷 和 敏
田郷岡 正秀 吉 田 恒 園 谷 秀 雄

1. 分科会の研究テーマについて

(1) 全体の研究テーマを受けて

本校では、「学びの場をひらく」という大テーマを掲げ、子どもの願いや求めに沿った活動を通して、一人ひとりの子どもの学びに着目してきた。そして本年度は、「子どもの主体的な学びを支える教師の関わりに着目して」という副題を設けて、私たち教師がどのような意図でどのように子どもたちと関わっているのかという共通の問題意識を基盤に、それぞれの分科会ごとに研究テーマ（研究の視点）を定めた。このうち4・5・6年の高学年の担任と理科専科からなる本分科会では、まず「子どもの主体的な学び」をどうとらえていくかが議論になった。そして、本来主体的であるはずの子どもの学びが、「学ばされている」という実態に陥っていないか、子どもの主体的な活動意識を育むのに適切な教師の関わりがなされているか、というような議論を経て、子どもが主体的に学んでいる姿の中に、その子にとっての活動目標が再生されていくプロセスが存在することを確認し合ったのである。私たちはそれを「目標再生」というキーワードに置き換え、その具体的な中身については、各自の実践事例をもち寄り、メンバー同士の相互検討を通して共通理解をはかってきた。

本分科会で取り組もうとすることは、「目標再生」という学習場面を生み出すための手だてを探ることではなく、あくまでも目の前の子ども一人ひとりにとって“いい活動”といえる実践を追究することにある。高学年の子どもたちと授業をつくりあげていく中で、その子にとって“いい活動”だと思える時、多くの場合、子どもが自分自身の学びを自己評価し、次なる活動のめあてを設定していくという学習プロセスが見てとれるはずである。しかし、子どもの活動意識を軽視したかたちで「目標再生」場面を教師が設定してしまうことは本末転倒である。

本分科会では、子どもの目標再生が停滞している時にどのように子どもの学びを支えていけるのか、あるいは目標再生が進行する時にどのような関わりが求められるのかを明らかにしたいと考えた。そこで、キーワードを「目標再生」として教師の関わりを分析することにした。

(2) キーワード「目標再生」について

目標という用語は、教育活動においても多種多様なレベルで用いられるため、本研究で追究しようとする「目標再生」がどのような観点で着目した言葉なのかを明らかにしておく必要がある。現時点では、以下の5点に整理して説明を試みる。

第一に、誰にとっての目標かという観点からいえば、教師の目標ではなくて子どもの目標である。教師がある活動を長期的に見通した単元の目標や1時間の目標などを指導目標とすると、

ここで着目するのは、その活動に取り組んでいる子どもの目標や1時間の授業における子どもの学習目標である。第二に、個の目標なのか集団の目標なのかという観点からいえば、学級集団による授業の目標を意識しての「個」の目標であるととらえたい。第三に、目標再生という意味は、それまでの活動を振り返って新たな目標を生み出すといった思考場面のみならず、子どもにとっての目標が更新される場合や、より強化されるという場合も想定している。第四に、目標が再生される際の前提条件として、その目標が子ども自身によって評価されるということである。従って、評価と目標再生は連続しているもの、あるいは一体をなすものとしてとらえるということである。第五に、目標再生とは学習過程における到達点に位置づけるのではなく、目標の提案→目標の吟味→(目標に即した)活動の進行→自己評価、といった子どもの学びのプロセスそのものととらえるということである。

以上のように「目標再生」という用語の枠組みを規定した上で、授業場面における子どもの目標再生のシーンを、具体的な事例を出し合いながら検討を重ねてきた。その結果、図1のような目標再生のプロセスは、その活動により多少の違いはあるものの、大単元のような単位においても、1時間の授業においても、それぞれ成立しうるものである。

つまり、1～数時間サイクルで成立する目標再生がエネルギー源となり、活動の大きな流れにおける目標再生が誘発されていくという、螺旋構造状に進行していくものと考えられる。それゆえ、教師は活動の表面上に表れる子どもの様子だけではなく、活動に関わる子どもの意識を的確に見とる努力をして、日々の子どもの状態を把握しておく必要がある。その子が目標再生のプロセスのどの段階にいるのか…それを見とれるかどうか大きなポイントになる。

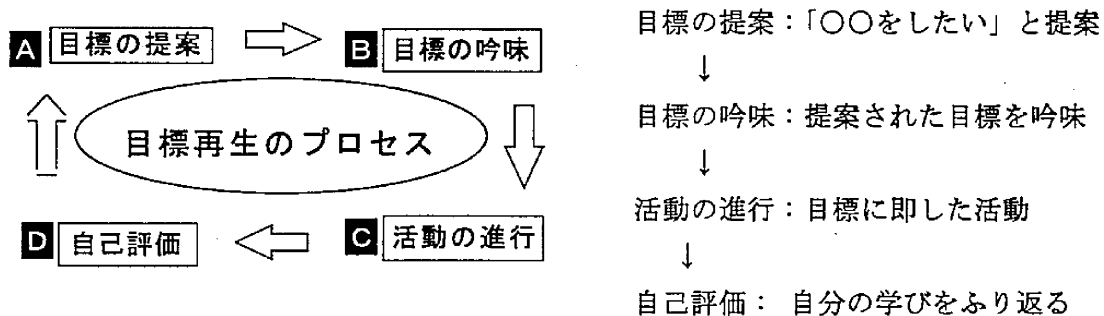


図1：目標再生のプロセス

「目標再生」をプロセスとして捉えるということ、子どもの立場で考えてみると次のようになる。まず、何らかの目標をもって「〇〇をしたい」という活動の提案がなされ、そのまま活動がスタートする場合もあるが、個々の願いがぶつかり合い、同時に進行できなくなる場合などは、それぞれの活動案がその目標レベルで吟味されることになる。そうした吟味を経て、活動が進行していくが、同時に自分の学びを振り返ることが必要になる。この自己評価を経て、活動目標が強化されたり、また新たな目標へと発展したりすると考えた。

(3) 活動における「目標再生」を支える教師の関わり

目標再生の場面とは、まず集団を単位とした活動の大きな転換点や活動の再構成場面で、それに属する「個」の目標も何らかの変化が認められるケースを想定できる。また、集団での活動としては目標に何ら変化のない場面でも、ある一人の子のこだわりが深まったり、見方・考

え方の視野が広がったり、その子の追究内容や方法が変更されたりすることが考えられる。その子にとっての目標再生を、教師はどのように支えていくべきなのだろうか。

まず、教師がひたすらその子の目標再生を丁寧に見とっていくという関わりがある。子ども自ら目標再生を実現している場合に、敢えて教師は“出”を控えるのである。一方、教師が子どもの目標再生場面に積極的に“出”る関わりがある。図1中のA～Dのいずれかの段階で停滞している子どもの姿を見とった時、教師は何らかの手を打って、子どもの目標再生を助けるのである。それは、ある一人の子に向けた直接的な指導であったり、学級としての活動を大きく動かす関わりをすることで、間接的に一人ひとりの目標再生を促すこともある。

以下、分科会メンバーの過去の実践事例の中から、子どもの目標再生が見とれた活動場面として考えられるものを、図1（目標再生のプロセス）に即して列挙してみた。

A：【目標の提案】

- ①色水遊びからお店屋さんの活動をして楽しかった子が、今度はビーズでアクセサリーをつくりお店に並べてお客さんに喜んでもらいたいと考えた。（1年生）
- ②3年生の時にやったコンサート活動が楽しかったから、もう一度このクラスでコンサートの活動をしたら、「心を一つに」のテーマも達成できるのではないかと考えた。（5年生）
- ③収穫した米を食べたいという目標で田植えをしていた子たちが、豊年エビの出現に喜び、農作業を体験する中で、「自分たちのブランドで売りたい」と言い出した。（5年生）

B：【目標の吟味】

- ④竹早祭に向けての話し合いの際、それぞれが自分のやりたいことを言い合うだけで、意見がまとまらないまま話し合いが停滞していた時、これまでの活動を振り返ってみて、「学級らしさ」を出せるものをめざすという方向の意見が言えた。（2年生）
- ⑤「町にあるもの」を調べたいと探検していた子が、「町の問題点」を見つけて解決するために調べ始めた。（4年生）
- ⑥後樂園メトロMのお店ごとの売り上げを調べることに固執していた子が、他のグループの調査報告を聞いているうちにクラス全体の活動のねらい「住みよい町にするために」を意識した取材テーマに変更して調べ始めた。（4年生）
- ⑦答えが3になるわり算の式をみてきまりを導く活動で、友達の学習感想をヒントに桁の大きな数や小数でも確かめてみようとする子が出てきた。（5年生）

C：【活動の進行】

- ⑧演奏担当の子どもが自己練習を積み、みんなで合わせてみた結果、不十分な点に気づき、さらに練習を積み重ねていった。（5年生）
- ⑨役を演じる子どもたちが、合わせて立ち稽古を始めた時、演出担当の子にその演技について評価を受け、さらに練習を積み重ねていった。（5年生）

D：【自己評価】

- ⑩みんなに注目される舞台上で目立ちたいという意識の子が、劇を創り上げるプロセスで劇で訴えたいテーマにこだわった演技を考え始めた。（6年生）

3. 研究の目的・方法

(1) 明らかにしたいこと

- ①それぞれの活動における一人ひとりの子どもの目標再生プロセスがどうなっているのかを、

具体的な事例を通して明らかにしていくこと

- ②それぞれの子どもの目標再生プロセスに、教師がどのように関わってきたのかをふり返り、子どもの主体的な学びを促したのかどうかを評価すること

(2) 研究の方法

日々の子どもの活動の中から目標再生の姿を確認するためには、表面上の子どもの言動のみならず、内面における子どもの変化、活動意識の推移を見とっていく必要がある。そのための手だては、活動の特性や個人の特性により様々であるが、一般的には以下のような手だてが考えられる。

- ①前時の子どもの学習の事実と本時のそれとの比較分析から
- ②前時の子どもの学習感想と本時の感想との比較分析から
- ③子ども同士で相談して設定された次時の活動内容の分析から
- ④子どもたちの話し合いの発言内容の分析から

(3) 分析の視点

子どもの「目標再生」プロセスの見とりと同時に、教師の関わりが適切であったかどうかとも評価していくことになるが、その際の分析の視点を次のように設定した。

子どもの変容	①どの場面でのどの子に着目したか（事実） ②子どもの目標再生をどうとらえたか（変化・変容） ③なぜそうとらえたか（根拠）
教師の関わり	④その目標再生に教師はどうかかわったのか（事実） ⑤どうしてそういう関わりをしたのか（根拠）
教師の願い	⑥子どもの学びはその後どうなってほしいのか（見通し・願い）

4. 提案授業について

5年2組余郷学級の「5-2新聞 編集局」という活動を提案授業として公開した。本活動は、新聞づくりという活動に関して言えば、今年度2度目の活動となるが、初回の新聞づくりに対する保護者からの意見・感想や自分たちの活動に対する評価をもとに、「もっといい新聞をつくろう」という活動目標が、本活動の成立動機の一つにもなっている。

グループごとに分かれて作業をすすめる学習形態をとり、それぞれが自分の目標に向けてどのような意識でどのような活動に取り組むのかを参観者に見ていただき、その中で授業者がどのような関わりをしていくのかを考え合うという意図をもった公開授業のスタイルとした。

参観者に対しては、当日に配布した本時案の中に、それぞれのグループのこれまでの活動経過や目標を示した資料を載せ、さらに、一人ひとりの子どもの活動意識・進行状況がどういう段階にあるのかを、目標再生プロセスにあてはめて分析した個人情報を紹介した。

授業者が一人ひとりの子どもの活動意識をどのように見とっているのか、その上でどの子に対してどのような場面で、どんな関わりをするのかを検討し合う提案授業を意図した。



5. 分科会協議の概要 …記録担当 佐々木千穂

(1) 授業者自評…余郷

①本活動について

「新聞づくり」は11月に一度行い、今回が2回目の活動である。朝の会で、新聞記事からみつけた話題を発表している。それを記事にしようという投げかけから活動が始まった。

5W1H、基本的なスタイルなどを指導してから1回目の新聞を作って、互いに評価し合った。新聞の出来映えに対する保護者の意見も子どもたちに紹介して、もう一度チャレンジして、さらによい新聞をつくっていこうというめあてをもってスタートした。

前回の新聞づくりの活動の反省をいかして、新聞の帳合については、セロハンテープ止めをしなくても済むような形式でつくることになった。

相手に言いたいことが伝わる記事を書かせたい。一般の新聞記事をそのまま引用して構成するのではなく、子どもたちが自分なりの視点でまとめて再構成していくことを期待している。

②パソコンの使用について

パソコンを使うことで作業の進度に違いがでている。今後、同じ日に発行しようということになるのか、グループごとに発行することになるのか。子どもたちの話し合いの推移に注目したい。

③本時の授業について

数日欠席が多かったため、活動そのものが停滞していた。8ページを8人で作っているが、分担の仕方はグループごとにさまざまである。

(2) 研究協議…フロア席に約200名

*以下、協議会記録から ○：フロアからの質問・意見／●：分科会メンバーからの応答

- | | |
|-------------|--|
| ○中山
(世小) | <ul style="list-style-type: none"> ・提案の米プロの例のように、子どもが満足して活動が終わり、次の目標が生まれてこないということはあり得るのではないかと？ ・前時の欠席のために活動が進まなかった子は、本時はどのような目標再生の場面と捉えるのか？ ・提案授業では、お互いの目標再生の場面を共有し合う場面があるとよかったと思うがいかが？ |
| ●伏木 | <ul style="list-style-type: none"> ・私たちがここでいう「目標再生」は子どもの目標であり、クラスの活動に関わる個の活動において、その子の目標のあり方を問題にしている。 ・一昨年度の米プロの活動では、確かに子どもたちはとても満足していた。しかし、お米袋の表 |

示に隠されている意味から、いろいろな農業政策の問題点にも迫れるはずのK男に、その機会を与えてあげられなかった。逆に、満足して終わってしまうような活動でよいのだろうか。深く追究すればするほど、何か問いが残るのでは。

- 余郷
 - ・前は、親には好評だったがクラスの中では読みにくいと不評だった。それを受けて目標を決めている。人に左右されてしまいがちな子どもには、しっかり目標をつくらせたい。
- 長崎(金小)
 - ・目標再生という考え方は大変重要なことだと思う。目標の吟味について、授業を行うときに難しさを感じる。診断・アドバイスということか。事例を抽象化して、一つのポイントとして出してもらえると日常の授業で使えるものになる。
 - ・新聞作りという活動目標についての吟味はなかったのか。
- 余郷
 - ・朝のニュース発表をする流れの中で、自然に「新聞作りをやろう」ということになった。2学期の学習の見通しを9月に決めた。いくつかの活動から何を選ぶかを決めるときには吟味をしていくが、今回(3学期)の話し合いではそういう場がなかった。2学期の活動の様子を見てみると、活動を経ながら吟味を進めているという面もある。
- 伏木
 - ・現在は実践を集めている段階。それをまとめて一般化する段階ではない。子どもの活動では、まず活動させてみてからその吟味の仕方を子どもが見つけれられるということもあるのではないかな。
- 野間(世小)
 - ・目標再生のプロセスのレベルが、集団、チーム、個人を単位とした場合に、吟味のさせ方にそれぞれ違いがあるのか。実践場面では、吟味は誰がするのか。子ども同士、教師対子どもなのか。
- 伏木
 - ・実際は学級の活動として目標の吟味をさせていくこともあるが、ここでは個人の目標に着目している。プロセスの中で活動が思うように進んでいる子には、任せていく。困っている子どもに対しては教師の出番がある。目的は主体的に学べる子どもを育てていくこと。
- 余郷
 - ・まず、子どもがどのような段階にいるのかを見とること。満足感がもっているか、問題にぶつかっていないか。B1児が目標再生プロセスのCからDに変わって、Aに戻っているという見とり。その子は活動の途中で別の新しい目標を作っている。その点について、実現可能な目標なのかどうか問いかけていくことが吟味の場になる。
- 田郷岡
 - ・子どもたちに書かせることも大切。担任から離れて個別の活動をしていると見きれない。自分が何をしたのか。どう思っているのかを書かせる。それを座席表に表してそれについて共通に学級全体に分かり合い、共通の問題としていく。ポートフォリオのような子どものファイルを作ることも有効。
- 吉田
 - ・座席表にどのような関わりをしようとしているのか記述されている。目標再生がうまく機能していくために見とりは必要。
- 原田(泊小)
 - ・子どもの求めを大切にしていこうという姿勢は本校でも持っている。主体的な学びを考えていくとき、今日の授業を問い直す必要があるのでは。新聞とは、何か主張したいことがあるときの手段の一つ。新聞の中身で何が伝えたいのかが子どもの求めであり、主体的な学びにつながる。「言いたいことを書き表させたい。」新聞を書くために何を書こうか、というのでは本末転倒。新聞を書くための強い思いがあることが大事では。
- 余郷
 - ・その通り。伝えたいことをみんなが持っていることが大切。1学期の読書新聞作りをみて、子どもの興味関心があった。それをもっと広げたいという教師の意図があった。
- 原田
 - ・5年2組で一番大切にしたいことは何なのか、それがはっきりしたときに共有していられる。教師の支援は子どもの求めに応じての支援。クラスで大切にしたいものに対しての支援が大切では。

- 田郷岡
 - ・子どもの求めと教師の願いが一致したときに活動が成立する。教師の強い願いがあったときに子どもが価値を見とめることができたら活動が成立する。その話し合いが不十分だったこともあるかもしれないが、教師の求めも出していかなければいけない。
- 幹下 (富山)
 - ・座席表など非常に個人を大事にしているという印象。個を重視した学びを捉える。行き詰まったときに教師が支援をする。個の学びを学級全体の共通の土台に引き上げる場の設定、流し方が大切だと思う。39人や40人を個で見ることは難しい。
 - 自分の四年生の実践で2人ずつ中間発表を行うようにした。人の発表を聞いていても自分の目標に生かせるような場をつくるのが難しいと感じている。
- 田郷岡
 - ・本校では、個で取り組む活動と学級で取り組む2つの活動がある。学級で共通に取り組む活動は、個の興味関心だけでは成り立たない。全体提案の中の劇や医学「ターヘルアナムトミア」がその一例。「ターヘルアナムトミア」が決まるまでに5月から学級で話し合いをもってきた。自分たちの活動を振り返り、自分が何をやりたいかという意見を座席表にまとめてそれをもとにして話し合ってきた。夏休み中、意見が絞られた「医学」と「コンサート」について自分のやりたいことについてのプレゼンテーションを行った。「コンサート」と意見が別れたときに何のためにその活動をするのかを子どもに問いかけていった。結果、両方行うことになった。一つにまとまらない時、教師の関わりは、自分のやりたいことだけを言っても決まらないので、「何のためにその活動を行うのか」ということだった。子供たちは、クラスの目標「心をついに」にあわせて決定していく。「医学」では自学帳のような個人の取り組みをみんなで認め合って「心をついに」できるのではないかとということで始まった。一つにまとまっていくためには、一つの目的意識が必要。
- 幹下
 - ・子どもの追求活動の目標を全体のものにしていく関わりはどうか。個人の追求活動の途中でもつ悩みを共通土台にあげるためにはどうしたらいいか。
- 伏木
 - ・個人の日記の中にそれが見とれたときに、場合によってはクラスに紹介し、それを学級の問題にしていくことがある。長い活動のなかでは、座席表でそれぞれのこだわりを見られるようにしていく。
- 余郷
 - ・今日の活動については、停滞している子を支えていくためには、みんなで扱わなければいけないこともある。パソコンができないD1のような子ができるようになりたいという願いを実現していくことが自己実現の場。他にもリード、見出しの付け方、要約のさせ方など必要と感じたときには、それを活動の途中でも全体で学べる場が必要と考える。それができるようになったときに、子供の願いがランクアップすることも考えられる。
 - ・「純日本産で食事をしよう」日本産について調べた。一人の子の「どこまでが日本産といえるのか」という疑問が学級に広がった。そのことをきっかけに貿易についての共通学習を行った。学級で必要な学習を共通理解していくことは必要。そのことをステップアップしていくことで次の活動に反映されていく。
- 渡辺 (秦野弦巻小)
 - ・学校全体として授業や教室掲示などからも、子どもをととても大切にしている印象が強かった。表現の部分では、これをうまくしていこうという願いを持っているようだが、教師の願いは「話題性」に向けていた。そこにズレがあるのでは。子どもの興味のあることはバラバラであっていいが話題性と一致するとは限らない。
 - ・新聞作りでやりたいことは自己実現、自己表現とするならば、自分の興味関心のあることを自由に集めたらよいのでは。
 - ・新聞作りのグループはどうやってできているのか。グループでなければいけないのか。

- ・授業を見て、言いたいことが言えることが大切だと感じた。教科の枠にとらわれない授業もいいと感じた。
- 余郷
 - ・保護者からの意見を乗り越えようという子どもたちの強い思いがあった。それは芸能情報はファンクラブ通信のようだという意見があった。関心事を好きなことと限らずに取材してわかったことをもとにして新聞を作ろうという意識が活動の原動力にあった。
- 西川 (明石小)
 - ・本活動のねらいは何か。期待する子どもの姿を通して、どのような力をつけたいと考えているのか。
- 余郷
 - ・「ねらい」に相当する部分を本時案いくつかに分けてある。まず、活動全体を通して「期待する子ども像」。それを実現するために、支える力として「指導要領の関連」が書いてある。合わせて読み取ってほしい。次回にはきちんと明記したい。

(3) 講評…奈須先生

1. 目標再生について

子どもが主体的に学ばされるというのではなく、主体的な学びが見られるときには、自立的な再生が進んでいくのではないか。主体的な学びというのは「なぜそれを学んでいるのか」「次に何をしたいのか」ということ。目標は一度作られて終わるのではなくて、それが変化したり、再生したりする。その再生の具合を見ることで学びの強さや深まりが見られるし、教師はそれが強くなったり、深まったりするように関わっていくということ。

その結果、子どもの学びがよくなっていることが大事。これは問題解決のプロセスに近い。

子どもの学習段階という、それを必ず踏まなければならないかということそうではない。ヘルバルトは思考の過程を記述したのであり、その段階を授業で追っていくことが必要だという理屈ではない。だから、指導案に「導入」「展開」「まとめ」という固定された流れも必要ない。(そういう形式を導入することで)教師が子どもを見なくなってしまうのでやめた方がいい。よい学習は自ずとそのような段階を踏んでいると考えるべき。

「目標再生」は、この段階を踏まなければいけないのではなく、一人ひとりの学習の構えを見やすくするために作っている枠に過ぎない。「目標再生」に着目すると授業はよくなるのかどうかと考えるのであればいい。研究的に丁寧に個の見とりをしているが、それを日常生活的にどう生かすかが重要。

— 実際には子どもの見とりをどのようにしておられるのか? —

●伏木 継続的な見取り。1時間に数名の時もあるが、気になる児童に対しては継続的に見ていくようにする。その子を中心にまた、みたい子が広がっていくことも多い。

できるだけやっていくことが大事。その見とりがあるから授業がよくなるという実感がもてることの繰り返し。ベストを想定してやらないこと。よりよくなることが大切。そのための方法を考えて検証していくことが研究。

2. 興味関心「子どもの求めとは何か」

「新聞」を伝えたい手段として扱うか、メディアとしての文化財としてそれを作っていくか。どちらでもありうる。後者の場合、新聞のもつ文化財としての価値を意識しているかどうか。新聞のもつ特質を子どもが理解できているかどうか。

竹早は今でも「子どもの求め」で始まっているはず。「子どもの求め」とは言葉に出された

ものとは限らない。子どもの中に、潜在的な求めがあるかどうかを見とる。自分の求めに気づいていないことはむしろ多い。対象に出会って初めて気づくことがある。子どもの中で意識化されていないものも見とって、具体的に教師が差し出していくことが大切。子どもが言ったことか教師が提案したことかということより、子どもにとっての切実さが大事。

子どもから出てきたことに教師がのっていくことも大事で、そこに教育的価値があるかどうかを判断していくようにする。「興味・関心」ではなく、子どもの現実にあった「求め」として、それにずれない感覚をもって実践をしていくことが大切。「興味関心」では軽すぎる。

3. 個と集団

クラス全員が同じ問題意識を共有しているかどうか大事。問題が共有された上でなら活動がばらばらになってもかまわない。「まちたんけん」は、場が一緒でも活動の問題意識が違ってはいけない。「職場体験」はぜんぜん違う場で学んだことが報告されて問題が共有されることもある。

追求の本質に関わることで子どもたちが同様の問題意識をもつ。そのことで「子どもが教材」になる。一人の追究が他の子の教材になる。

4. 教師に求めること

現場の教師の関わりが二極化している。「子ども中心」か「詰め込み主義」かという問題。「子ども中心」と言いつつ「放任」や「迎合」は子どもに対する「無関心」の姿勢。「詰め込み主義」の「管理・統制」も子どもに対する「無関心」の表れ。教師に求められる大切なことは、子どもに重大な関心を寄せること。

(4) 講評に対する質疑応答

○上村（大泉） 子どもの求めを見とっていく。自分と異質のものは子どもの求めとなりにくいことがある。そのような場面の対応の仕方は？

●奈須 単元に入るまでにレディネスがない。子どもの求めは対象との相互作用で常に流動しているもの。子どもたちがやりたくなるように環境提供を少しずつしていくことが大切。出会いの経験、触れ合う経験を事前に持たせておくことで、子どもの求めに近づいていく。

5. 研究の成果

本分科会では、まず「主体的な子どもの学び」についてのお互いの意見交換をきっかけとして、4～6年生までのこれまでの実態をふまえて分科会テーマを設定した。本校の過去の研究にも登場する「目標再生」をキーワードとして、子どもが主体的に学ぶことに教師がどう支えたらよいかを考えてきた。

実質的は、一人ひとりの子どもがどのような活動意識をもって臨んでいるのかを探ること。それによって、その子が目標再生プロセスのどのような段階にいるのかを診断すること。その診断をもとに、その子の状況に応じて何らかの関わりをすること。さらに、その子への教師の関わりが妥当だったのかどうかを、その後の子どもの活動意識の変化を探りながら評価すること。という4つのステップで研究をすすめてきた。

こうした本年度の研究を通して明らかにできたこと、研究の成果といえるものは何かを分科会メンバーで話し合ったところ、次のような声が集まった。

- ・それぞれの子どもが、何らかの物事に対して、どのような着目のしかたをするのか、あるいは見方・考え方にどのような傾向があるのかがわかってきた。
- ・教師が見とった子どもの学びと子ども自身がふり返る学びとがずれている状況を把握できるようになった。
- ・子どもの学びを、目標再生のプロセスとして見とっていく姿勢を得たことで、子どもの状況を短絡的に結論づけることがなくなった。点（場面）としての評価ではなく、線（プロセス）に位置づけた評価を意識するようになった。

これらの意見もふまえながら、今年度の本分科会の研究成果を整理すると、次のように集約できるように思う。

（１）「目標再生」プロセスを説明できる具体的な事例の集積

それぞれの活動において、一人ひとりの子どもがどのように目標再生のプロセスをたどっているのかという道筋を分析できる事例をいくつか収集できた。そのことで、目標再生というキーワードの具体的なイメージが描けるようになった。

（２）「目標再生」という観点からの子どもの学びの見とり

日々の授業において、子どもの活動意識やその時の学びの状態を見とる際に、子どもにとっての目標再生プロセスとして分析するという構えができた。すなわち、子どもの学びに対する教師一人ひとりの見方・考え方、その子の見とり方について、教師同士の教育観の交流ができ、子どもについての情報交換がしやすくなった。

（３）子どもの学びを支える教師の関わりについての情報交換

一人ひとりの子どもの着眼傾向やこだわりを生かした教師の関わりを共同で検討することができたこと、実際の活動場面でそれぞれがどう“出”るかについて意見交換ができたことが大きな収穫だった。

これにより、活動のいわゆる 0 次案から N 次案の作成に至る展開構想の手がかりや、構想を修正・改良していく際の判断材料が得られたということも研究の成果に加えたい。

（４）子どもの側から見た本研究の成果

子どもの立場に立って今年度の授業研究の取り組みをふり返ってみると、多くの子が活動のふり返りから次の活動目標を意識するようになり、まさに自己評価から次の活動をつくることができるようになったこと。また、自分で決めた目標に向かって主体的に学んだ結果として、どの子も自信をもって活動に取り組むことができるようになったことを指摘できる。

5. 本研究の今後の課題

本研究においては、二つの重大な課題を残している。一つは、「目標再生」プロセスを意識した活動の実践を積み上げていく中で、より適切でより子どもの意識に沿った自己評価のあり方を検討していくこと、もう一つは、目標再生プロセスを手がかりに、子どもの主体的な学びを支える教師の適切な関わり方について、事例を蓄積しながらさらに具体的に提案していくことである。今後も日々の実践を通して、これらの課題の解決にむけて努力していきたい。

（文責 伏木久始）